

「お蔵騒動・静かな一揆、幕末の貧農を救え」

「階上村誌・岩月村考證」から

江戸時代の歴史で大飢饉といえは、寛永、元禄、享保、天明、宝暦、天保の飢饉があげられる。大規模であり、そのほとんどが寒冷な東北の地であったものだ。特に天明、宝暦、天保の大飢饉は江戸の三大飢饉といわれる。

江戸期は総じて地球的な寒冷期にあった。これは、太陽の黒点の出現による活発・不活発の周期的な変化と太陽自体の磁場の逆転変化によるものである。このような寒冷期には、日本だけでなく世界中で異常気象があらわれた。同時期にイギリスでは、首都ロンドンを流れるテムズ川が凍りついた。これは有名な現象だ。ヨーロッパ史の一大事件、ゲルマン民族の大移動も、この太陽の異変による地球の寒冷化が大きな原因だと論ずる学者がいる。

江戸期にしばしば起こった飢饉は当然農民の疲弊をもたらした。それでも農民には年貢、公租の負担があった。領主が非道な者であれば、農民は一揆や打ち壊し

などの暴挙に出ざるを得なかった。

当地には「義倉」といつて付近一帯の新田開発のためや荒田のために種粃、大麦、大豆を百姓に貸し出すための備蓄庫が何箇所あった。後年になって「郷倉」ともよばれたらしい。この「義倉」は「お蔵」とも称し、尾崎地区には千疋田屋敷から分家した「お蔵守り」という屋号の農家がある。きっと義倉にまつた役割があったのだろう。文化元年の「松崎左我志」には「御蔵場、義倉というなり、尾崎史郎右衛門、御蔵守にて同人持ち高十文地：貸し下げ倒目になる。」とある。尾崎には松崎、赤岩、岩月、最知、長磯、波路上の六か村のための義倉があった。天保の大飢饉には及ばないが幕末・慶応期にも不作で百姓が大変に困ったことがあった。

この物語はこのような幕末情勢において史実にあった出来事ではあるが、原本（階上村誌）には若干の不明点や筆者の挿入文もあり、創作色を濃くして物語にした。

この地では天保の大凶作の時に鮎貝の殿様が慈悲で伊達藩にかけ合い、藩のお蔵米を貧農に分け与えたことがあった。慶応の飢饉でも何とかお蔵米を分け与えてほしいとお蔵守に懇願したそうだ。しかし、時は幕末、不安定な時期であった。お蔵役人達はお蔵の粃、麦、大豆をひそかに唐桑方面の商人に闇売りしていたのだ。こ

これは法を犯す大罪である。幕末の治安は混乱していた。天保期とはちがいで、百姓の願いを役人が懐に入れて握りつぶしたといえようか。

次に、百姓の願いは、百姓のとりまとめ役である肝煎や大肝煎がまとめ、直接役人に申し出る形をとった。しかし、役人どもの計画的な手違いや怠慢行為で、鮎貝の殿様まで届くことがなかった。

このようなことがいく度も続き、百姓達は口々に「一揆」を語るようになった。

尾崎の百姓憲作(のりさく)は同じ水呑百姓達から信頼される男だった。肝煎たちも憲作を水呑百姓達のつなぎ役として頼りにしていた。役人達の不始末、腐敗に対して肝煎も心にすえかねていた。だが、身分制の時代である。肝煎は憲作に、水呑達の不満を何とかおさめてくれるように頼むのであった。こんな矛盾はいつか爆発する。憲作は考えた。悩んだ。このままでは村から飢え死にする者を数多く出すことになってしまう。といって一揆をすれば、処刑される者を何人も出すようになる。鮎貝の殿様への直訴はどうか。この頃の役人達の動きを見ると、とて



も成功しそうにない。何日も考えた。結論は「静かな一揆」。誰も処刑されず、百姓は命の粉や麦を手に入れる方法だ。さて、どうするか。

近頃は、世情不安のためなのか、松崎の村内に流れ者がうろつくようになった。この中に八三(はちぞう)という者がいた。そして友の遊び人、万介。この二人は義侠心にあふれた遊び人で、村内近村にいる流れ者達を束ねていた。水呑百姓達が困っていることはうわさに聞いていたが、彼らには「かかわりのねえ、ことごとくさんす。」というわけ。

ある日の夜に近い夕暮れ。尾崎橋をこの二人がふらふらと渡っていたときだった。橋の下に人影が見える。二人は土橋から首を橋下に伸ばし、目をこらした。なんと、女が赤子を水中に沈めているではないか。

二人は互いに顔を見合わせた。次の瞬間、



ザブんと川に飛び降りた。

「何をしやがってんでえ。お前のガキかい。水に沈めて殺そうってのかい。まだ赤子なのによお。おまえ、間引きでもするってえ氣かい。」

「お前さんねえ。おれらの目にとまったらねえ。そんなこと許さないよ。きっとお前の馬鹿ゴデ（夫）が食い物ねえって、間引きばさせたんだらうが。」

女はわれに返ったのか、目を見開き、赤子をしっかりと抱きしめた。そしてやつの様子で口をひらいた。

「ワダスが勝手にやったことだから、許してけさいん。」

「うそ語るなよ。ダメだ。お前の馬鹿ゴデにしっかりと言いふぐめでやっから。お前の家さいぐぞ。」

二人と女が着いたのは、憲作の弟の家だった。駆けつけた憲作は、弟夫婦の愚かさに腹が立った。だが二人の流れ者を見て

「仏、神はあったんだ。ほんとに。」

とつぶやいた。体中に熱い血潮が広がるのを感じた。「静かな一揆」の計画は、このあと直ちに練られたのだ。

まず、八三を中心にお蔵破りの仲間達が集められた。遊び人、侠客、腕に覚えのある豪の者、一芸一能に秀でた者。憲作と氣心が通じる各部落の水呑も加わった。

そして、次のようなお蔵破り計画が練られた。

一 夜討ちであること。しかも上げ潮の夜。北風が吹いていけばなお良い。

二 部落毎の割当てとして、一部落五人を出す。おとなしい馬を二頭出し、それに若者が三人つく。

三 役割について。ここが肝心。役人との交渉役はよほど肝がすわっていないといかん。お蔵の番人の追っ払い役は腕がたたぬといかん。駄送役は馬を静かに扱って荷物を手早く運ばせる。浜船役は荷を素早く船にのせてすぐに沖に出すことのできる者。操船のあざやかな者。

四 場所や経路について。まず片浜台場辺りから進み、お役宅で直談判で交渉を行う。お蔵守とも交渉する。お蔵場で計画を実施する。荷駄を尾崎橋経由で運ぶ。海路と街道筋の二方向に運ぶ。

ついに決行となった。ある夜のことであった。数頭の馬が、部落毎に若者にひかれて集まってきた。ここは尾崎の長須賀浜。天運よく、強風で潮騒が激しく、人馬の声などは聞き取れないほどだ。これならばお蔵やぶりも氣づかれまいというものだ。

お蔵守との交渉役となった八三は片浜の台場から入り、義倉のお蔵守役宅の戸をたたいた。

「あっしは、流れの八三と言ひあす。お蔵守様には日々伊達様義倉のご警護お疲れさんです。ところで、最近の凶作はひどいもんです。水呑百姓らは食うものもなく

難儀しております。苦勞のあげく、御法度の間引きまで思いつめる有様です。筋道をたて、何度が肝煎を通してお蔵の物の貸し付けをお願いいたしました。けれども、いっこうにらちがあきません。本日、今夜は、この八三、義を感じ、じかにお蔵守様へと、お願いに来ました。」

流れ者にしては立派な交渉役言上であった。しかし、お蔵守役人は全くとりもあわず、高飛車に言い放つのだった。

「流れの分際で、何をぬかしおる。我らは蔵守役ぞ。蔵の物を貸し付けするなど、藩主様からの命がなければありえぬこと。とっと失せよ。さもなければ、お蔵の番人に命じて、痛い目にあわしてくれようぞ。」

と。それを聞いた八三は交渉役であることをすっかり忘れて本性を出した。

「おいおい、おい。てめえ言わせておきゃあいい気になりやがって：何が藩主様だ。伊達のお殿(と)さんに成敗(せいばい)されるのは、てめえらの方だろうが。お蔵の物をくすねて、唐桑の商人に売り飛ばし、ふところを温めてんのはどこのやからかだよ。おめえらだらうが。」

お蔵役人はたじろいだ。そこで、身構えていた番人達が八三をめぐがけておそいかかってきた。棒でたたきつけようというのだ。八三はひらりと身をかわし、お蔵役人をなぐり倒した。八三の後ろに隠れていた万介も加勢にはいった。みごと番人の向こうずねを、棒でしこたまたたきつけた。番人ははい回り、逃げ回る。お蔵役人は縄で猿

ぐつわされ、身動きできない様となった。役人の妻子や家族もみなそのようになった。「この腰抜け馬鹿侍(こしぬけばかざむらい)が。」と八三は捨てぜりふをはいた。

静かなお蔵破りは次の段階に入った。お蔵にある籾(もみ)の駄送である。これもまた計画通りで、馬も静かにつとめを果たした。若手の百姓も指図通りだった。なんと、一時間もかからずに完了したのだ。ほんとうに静かだ、まるで何事もなかったようであった。ただ聞こえるのは、猿ぐつわされた役宅の者のうめき声だけ：義倉には、火が放たれた。証拠隠滅(しょうこいんめつ)のための火であった。



検断(警察、裁判権を持つ役)である鮎貝家の家臣達は、かけつけた義倉の番人達の報

告を聞いて、押っ取り刀で義倉に駆けつけようと屋敷を出た。この時、お蔵破りの一行は、陸路の駄送から海路の駄送となっていた。馬は最知に入り、長須賀浜で舳を船に積みかえた。船はすでに出帆していたのだ。鮎貝家の家臣達が尾崎橋にかかったところ、橋のど真ん中に大手を広げて立ちふさがる者があった。

「おいおい、あんたら、こんな夜中にどごさ行ぐんだ。ここは尾崎橋つう伊達様の大事な橋でありすて、この橋はな、夜中は通行禁止でがんす。何か急ぐならば、鮎貝の殿様からの通行判(許可証)ば見せてけらいん。」

潮騒にまけない大声で、武士達をにらみつけたのは八三だった。家臣達は、橋を渡らないと義倉に行けないので、

「何、ぬがしおる。我らこそが鮎貝様の家臣じゃ。伊達藩のこの一帯の検断であるぞ。そんなご判などなくとも尾崎橋は堂々とわたるべし。」

「この暗闇で顔も姿もよく見えねえがら、ご判ば見せてけらいんって言うてんのつき。わ



だしは、ご法度やぶりは許さねえがら。」

八三の話に、家臣の頭目らしき者がいきりたって叫んだ。

「者ども、橋の邪魔者(じゃまもの)を切り捨てても橋は渡るべし。」

家臣達が刀を抜いたその時だ。義倉に火柱が上がった。義蔵に放たれた火が風にあおられたのだ。建物は一気に大きな炎に包まれた。頭目の顔が炎で赤々と照らされた。また八三が言った。

「だんなら、よっぽど頭に来ていると見えるねえ。お顔が真っ赤っかだぞお。なあ万介、おもしろいやなあ。法度破り(はつとやぶり)の赤猿どもが、刀ば振り回して橋を渡るんだとさあ。」

顔だけでなく、頭にも血がのぼった家臣達は、どどーっと八三におそいかかった。八三の後ろには、いつのまにやら流れ仲間の直五郎が現れて、斬りかかってくる家来達をみことなさばきで、右にはらい、左になげうち、次々と面瀬川に投げ込んでくれた。ずぶぬれの武士達の姿は、赤い炎に照らされて、言葉にしようもないくらい滑稽(こっけい)であった。武士達の仲間も負けじと、次々橋に押し寄せた。と、尾崎側の橋のたもとから、八三の仲間の清天狗が、

「八兄い、直兄い。なかなか手ごわくなったようだねえ。だが心配はご無用。この後ろ

には、千次郎、万介、そしてこの俺様が控えてますってんだあ。へっぴり侍なんかあ、ちつともこわくねえぞお。」

橋を境に、片浜側にはさらに家来達が増えてきた。白鉢巻に青竹を持った足軽下っ端者も集まってきた。家臣の頭目は、

「あんな流れ者ふぜいに、なんたるざまだ。

お殿様に対して面目次第もないではないか。何としても賊(ぞく)をとらえよ。鉄砲も持って来らっしゃい。」

しかし、強風のため闇夜の火は次々と燃え移る。このままでは尾崎一帯が火の海になってしまおうではないか。家臣の頭目がそんなことを考えている間に、橋の上から「賊」が消えた。もう誰もいない。家臣達は火事を消すのに大わらわ。八三達をさがすどころではなくなった。

へとへとになって迎えた翌朝、家臣の頭目は徹底的に領内の家宅を調べた。しかし、



百姓達は、だれもかれも、

「へえー。そんなことあったのすか。なんとまあ、たまげたもんだ。」

と言うばかりだった。流れ者達はいったいどこに行ったのやら。領内では見つからなかった。それもそのはず、策謀家達は直轄領外のお塩木山に隠れ込んでいたのだった。

そして二ヶ月が過ぎた頃のことだ。八三(はちぞう)から、

「おまえさんは、酒がもとでいつもしぐじりばかりだがら心配してんだ。命取りになるがら、これからの三年間は酒ば飲んだらだめだよ。なっ。」

と言われていた万介(まんすけ)だが、八三の思いに反してこんなことになった。津谷の村の飲み屋でのことだ。万介は酔った勢いで話し始めた。

「この間の、尾崎のお蔵破り。あの見事といったら、諸葛孔明の知恵か六韜三略(中国の兵法書)の戦上手か。日本ではたしか鞍馬天狗(くらまてんぐ)だな。役人達にあんなほえづらかかせ鞍馬のお寺に帰ったそう。まあみんな、あん時の俺たちの見事な蔵破りの話は聞いてくだされや。」

万介の後ろの肩越しに、神妙な顔で話を聞いていたのは大谷の岡っ引き壇助だったのだ。壇助は仁王立ちになって、いきなり話をささぎった。

「おめえだなあ。この野郎。鮎貝様からの厳命だぞお。何が何でもつかまえよとな。この辺の岡っ引き連中はみんな、探しまくってたんだよお。」

壇助は、近くにあった荒縄で直ちに万介をからめとった。屯所に連行された万介は、

青竹で百たたきにされた。青くはれ上がった体で、息をきりきりさせ、とうとう白状した。万介は、自分も含めて、八三、直五郎、清天狗、千次郎の流れ者五名がお蔵破りをくわだてたもので、あとはみんな旅の者の仕事だと言った。各部落の水呑百姓のことは微塵(みじん)も口にしなかった。その後五人は、伊達藩の義倉破りをしたということで直轄地の犯人として扱われた。荷物のように扱われて、階上前から塩積み船に乗せられ、海路を石巻まで運ばれ、牢につながれた。

お蔵(きば)きはあったが、時代は明治維新の直前で政情は不安定。右だ左だと裁きは分かれた。お蔵役人達の不正もあり、義倉の意義からいえば、百姓に米粃を貸し付けるのが当然の理である。おとがめはいかなものか。いや、理由はどうあれ御法度やぶりは罪である。しかも武士へのこけおどしまでしたのだから、罪をとがめないでは何のためのご政道であろうか、など。結局この者達はやつこの刑(顔に入れ墨する刑罰)で赦免となった。最後まで、五人が五人とも、一切部落の水呑百姓たちの名を口にしなかった。おかげで百姓たちには何の嫌疑もかからなかったのだ。

この流れ者達がどこに消えたのかは誰も知らない。その後、お蔵からの粃を蒔いた田は、秋には黄金の実りを得たという。また、水呑百姓達は八三らに感謝の気持ちをおしなすのを忘れた。やつこの刑の姿をひどく気の毒に思い、五両の大枚を集めて、とおし籠(乗り継ぎなしで目的地に行く籠)でそれぞれ帰郷をさせた。万介は百たたきの責めがもとで、白木の箱での帰郷となったそう。当時は、無法者と言っても真の仁義や憐れみをもった者が多かったようだ。この事件は不正や権力悪への庶民の抵抗の物語とも言えよう。



昭和20年代の尾崎橋(木橋)
河口から上流を臨む